

AI活用に動き出すメディア業界

自走式の掃除用ロボットのテレビCMが目についていたとき、「AI+掃除機能」という議論より、パターン学習という認識が強かったように思う。パターン行動をセンサーなどで判断するもので、センサー情報の高速に処理に驚いていた。AIは、こうしたパターン認識を重ねた上での、新たな判断などの機能になるわけで、その要素の多くはパターン認識がカバーしている。こうした機械学習、ディープラーニングのアルゴリズムから生まれたAIの機能が、すでにメディア業界で活躍が始まっている。その最前線動向を取材した。

(レポート・写真:吉井 勇・本誌編集部)

AI読み上げ (TTS) 技術が変える

エフエム和歌山

大活躍するAIアナウンサー “ナナコ”

和歌山市のコミュニティFM局であるエフエム和歌山では、2017年7月からAIアナウンサーのナナコが活躍している。9月17日に和歌山県を台風18号が通過した際、県内で4,000戸以上が停電となり、情報源がラジオのみという事態に陥ったが、AIアナ・ナナコの声が警報情報などを伝え続け、市民の不安を和らげたのである。

AIによるTTS機能を採用

エフエム和歌山で企画・編成を担当するクロスメディア局長の山口誠二氏は、「Amazon Web Services (AWS) のAIサービスの一つである文章をリアルな音声に変換するサービス『Amazon Polly』(以下、Polly) を使って、ニュースと天気予報の放送を行っています」とAIアナウンサーの仕組みについて話し始めた。

採用したPollyは、文章(Text) データを基に自動で読み上げる「Text to Speech」(TTS) 機能を機械学習によって提供するため、山口氏は時間どおりに放送を開始する「ONTIME PLAYER」と、繰り返し24時間放送し続ける「Da Capo」の2つの放送用Webシステムを開発したのである。

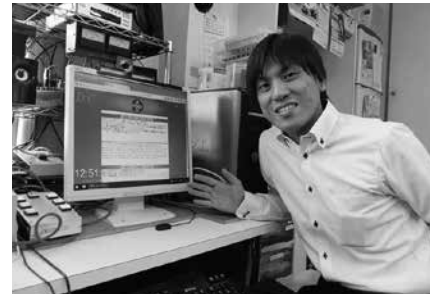
ルビ付き漢字を2度読みさせない

自動で読み上げるニュースデータは、読売新

聞の記事データと気象庁の天気予報、災害時は県や市の災害対策の情報データである。

「ニュースや天気予報のデータを自動取得して、ラジオ放送に対応できるように推敲し、Pollyのフォーマットに自動変換するアルゴリズムを独自開発しました。これによりBGMやサウンドエフェクト(SE)の再生タイミングやボリューム調整を行い、事前に設定した時間に放送を開始できるようにしました」(山口氏)

新聞社から提供される記事データを放送用原稿として使うために「いろいろな問題があります」と山口氏は指摘する。記者によって表記の仕方が違うことがあり、例えば「対北朝鮮」が「対北」と略されているなど、表記が統一されていなかったり、23時59分のデータを放送時点で「今日」とするか、「明日」と読ませるか。同じように「今月」や「今年」、「二日前」とか「明後日」がある。また、原稿データが長い場合、ラジオ放送用にどのようにして自動で短くするのか。さらには、読みにルビが振っ



AIアナウンサー“ナナコ”の生みの親、エフエム和歌山クロスメディア局長の山口誠二氏

である場合、そのままPollyに読ませると2度読み、つまり漢字とルビを読むことになる。こうした課題を、山口氏はラジオ放送の経験をもとに、ソフトウェアを独自開発したのである。ちなみに山口氏は、前職はWebのプログラム開発を担当していた。その経験が存分に生かされたと言える。

山口氏が開発したラジオ放送対応自動化ソフトウェアとPollyの連携で、ディレクターやアナウンサーのいない完全な無人の生放送ができる。「PCとインターネットがあれば、どこからでも放送が可能ですので、災害時などで柔軟な対応ができます」と力説する。

災害時に最新の安心情報を 24時間読み続ける「Da Capo」

この完全無人化の放送という仕組みは、人